前期日程

令和6年度入学試験問題

総合問題（日本語支援）

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで，この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 解答はすべて別紙解答用紙に記入しなさい。
3. 解答用紙は3枚です。
4. 解答方法が論述方式の場合は，1マス目から書き始め，1文字空けたり，改行したりせずに横書きで書き進めなさい。
5. 各解答用紙には，受験番号を記入する欄がそれぞれ1箇所あります。
6. 試験終了後，問題冊子は持ち帰りなさい。

I　以下の文章を読み，後の問いに答えよ。

「この楽器」と私の関係は，少々やっかいだ。なにしろ私は，拙(つたな)い音楽人生の最初から，その存在を知っていたようなのだ。

その楽器は，ショウケースのうっすらと曇ったガラス越しに，若いころの私を見ていた。一九八三年の秋，私はまだ高校生だった。当時のことはすでに記憶が曖昧(あいまい)なところもあるが，少なくともシンショク[I]も忘れ，始終ヴァイオリンを弾いていたことだけはたしかだ。

私は中学生のとき，思いがけずクラシック音楽の道に進むことを薦められ，高校進学と同時に九州から単身上京した。故郷よりも早く日の短くなる晩秋の東京で，あるとき，稽古(けいこ)中にヴァイオリンの弦が切れた。それを買いに行くために，私は右も左もわからぬまま，ある有名楽器店に飛び込んでしまったのだ。

店の扉を開けると，銘品らしさをカモ[II]①し出す楽器の数々が並んでいた。そして奥には，音楽雑誌でしか見たことのないような，木漏れ日②の降り注ぐ欧風の工房。ヴァイオリンの材料である白木の板と，よく研がれた道具が置かれていた。その雰囲気に，経験の浅い私でも，さすがにもっとうまくなってから来るべきお店だと尻込みをした。

そのとき，奥のほうから，琥珀(こはく)色のパイプがよく似合う，恰幅(かっぷく)のよい紳士がゆっくりと歩いてきた。

「こんにちは。なにを（　③　）」

その人が，クラシック専門誌の前月号で，ヴァイオリン店特集のインタヴューを受けていた人物だと一目でわかったので，私はますます動揺してしまった。木下弦楽器株式会社の代表取締役社長，木下多郎氏だった。おずおずとヴァイオリンの弦を注文してから，私が店内の飴(あめ)色に輝く楽器に眼を泳がせていると，木下氏から一言「弾いてみませんか？」と声をかけられた。そして，背中を押されるように美しいヴァイオリンを手渡された。

美酒に酔う，という表現の通り――大人になった今でも，自分が酒の味を本当に理解しているのか疑問だが――，良質の音に包まれて，私の心はすっかり酔っ払ってしまったようだった。高揚感と，体に直接入ってくる響き。それは，日々のレッ

スンとはまったくちがう，はじめて経験する「なにか」に満ちているような気がした。私は夢中になって，そのころ，自分が練習していた曲を弾いた。だがそこで，

「楽器を泡ぁ食って弾いちゃいけないよ。落ち着いてゆっくり鳴らさなきゃ」

と木下氏にずばりと言われて目が覚めた。九州から出てきた私には少々きつい，江戸前な言葉の洗礼だった。

こののち，私は高校からの帰り道に店に立ち寄らせてもらっては，木下氏の機知④に富んだ「ヴァイオリン千夜一夜物語⑤」をねだった。それこそ，紙芝居に見入る子供⑥のように，ワクワクしながら聞いたものだ。

そのうち，私は東京藝術（げいじゅつ）大学に進学し，専門をヴァイオリンからヴィオラに替えた。あっという間に月日は流れた。一九九八年，プロのヴィオラ奏者となっていた私は，仕事で長く滞在していたヨーロッパから帰国し，東京都台東区に小さな音楽事務所を設立して演奏活動を始めた。久しぶりに木下弦楽器を訪れようと足を向けると，渋谷の街は若者でにぎわい，すっかり様変わりしていた。だが，店の扉を開けると，あのころと変わらぬ光景が待っていた。

二〇〇三年のある日も，店の扉を開けると，木下氏は親子連れの客――母親と男の子，たぶん小学校の低学年だろう――に，親切に細かく楽器の扱い方を説明しているところだった。

私はぶらぶらと楽器などを眺めながら，氏の手が空くのを待った。やがて，母親が勘定を始めると，男の子が傍（そば）を離れてショウケースを覗（のぞ）き込んだ。私がはじめてこの店を訪れたときに見入ったのと同じ，古いショウケースだ。その光景に，私は思わず遠い昔の自分を重ねた。

その刹那，男の子は無邪気に，「お母さん，こんなに小さなチェロがあるよ」と声を上げた。

小さなチェロ。そんなものが，このショウケースに入っていたっけ。

私はその子の肩越しに，かつて見慣れたはずのショウケースの中を見た。おや，この楽器はたしかに，昔からあったぞ。ヴァイオリンばかりにしか注意の向かなかったあのころの私には，この楽器が見えていなかったのかもしれない。

ショウケースの少し曇ったガラスには，「その楽器」を覗き込む男の子と私の姿が，重なるように映っていた。

（出典：平野真敏『幻の楽器ヴィオラ・アルタ物語』集英社新書，2013年，12–16頁に基づき，一部改変）

問 1　下線部Ⅰ「シンショク」，下線部Ⅱ「カモ(す)」をそれぞれ漢字で書け。

問 2　下線部①「飛び込んでしまった」について，「飛び込んだ」ではなく後悔の意を含む「飛び込んでしまった」となっている理由として最も適切なものを，下記の選択肢の中から一つ選び，記号で答えよ。

a　自分の年齢とは不釣り合いな店だと思ったから
b　自分の技量とは不釣り合いな店だと思ったから
c　自分の身なりとは不釣り合いな店だと思ったから
d　自分の経済力とは不釣り合いな店だと思ったから

問 3　下線部②「木漏れ日」の「木(こ)」と単独の名詞「木(き)」との関係と最も近いものを，下記の選択肢の中から一つ選び，記号で答えよ。

a　神―神主　　b　船―船乗り
c　傘―日傘　　d　雨―小雨

問 4　空欄③には尊敬語を用いた表現が入る。③に入る言い方として最も適切なものを，下記の選択肢の中から一つ選び，記号で答えよ。

a　お探ししますか　　b　探しておりますか
c　探していますか　　d　お探しですか

問 5　下線部④「機知」とほぼ同じ意味で「機」が用いられている語を，下記の選択肢の中から一つ選び，記号で答えよ。

a　機密　　b　機関　　c　機転　　d　機体

問 6　下線部⑤「千夜一夜物語」は，本文ではたとえとして用いられているが，本来はアラビア周辺の物語を多く集めた文学作品のことである。このような，古くから語り伝えられた物語を集めた文学作品は「説話集」と呼ばれ，日本でも多く作られた。日本の説話集を下記の選択肢の中から一つ選び，記号で答えよ。

a　枕草子　　b　十訓抄　　c　万葉集　　d　大　鏡

問 7　下線部⑥「紙芝居に見入る子供のように」に用いられている表現技法を下記の選択肢の中から一つ選び，記号で答えよ。

a　直　喩　　b　隠　喩　　c　擬人法　　d　省　略

問 8　二重傍線部「なにしろ私は，拙い音楽人生の最初から，その存在を知っていたようなのだ」とはどういうことか，本文に即して八十字以内で説明せよ。

II 以下の英文は，一般的な米国人(英語を母語とする話者)の Why study languages abroad? という質問に対して，言語の専門家が丁寧に答える形式になっている。これを読んで，後の問いに答えよ。文章末の注も参考にすること。

この個所は著作権の関係で公表できません。

この個所は著作権の関係で公表できません。

注

pitfall　落とし穴，わな

immersion　言語学習法の一つで，学習者をその言語が話されている環境に没入させることにより習得を目指すもの

be plunked　ぽんと置かれる

mimic　まねをする

assumption　仮定，考え

disorienting　困らせる，途方に暮れさせる

enroll in　～(教室など)に登録する

come alive　活気づく

dreaded　おぞましい

junior　大学3年生

socialize with　～と交流する

soak up　～にひたる

unruffled　動じない，冷静な

imply　意味する，ほのめかす

make sense of　～を理解する

sterile　実りのない，面白みのない

bureaucracy　役人，お役所(仕事)

anglophile　英語好きの人

semester　学期

subtitles　字幕

(Sheri Spaine Long, "Why study languages abroad?", E.M.Rickerson and Barry Hilton 編，*The 5 minute linguist*, 140–141 頁に基づき，一部改変)

問 1　下線部(1)の段落において，「あなたは～ですか，それとも～ですか？」という形で2つの言語学習者のタイプが説明されている。この2タイプはどのようなものか。本文に書いてあることをそのまま訳すのではなく，「～する人と，～する人」「～な人と，～な人」というように，簡潔にまとめよ。

問 2　二箇所のカッコ(2)には同じ語が入る。次の選択肢から，このカッコに入るべき最も適切な語を選べ。

a．aim

b．effort

c．goal

d．notion

e．thought

問 3　下線部(3)を日本語に訳せ。

問 4　下線部(4)にある ripcord とは，パラシュートの開くためのひものことだが，その 5 行前に出ている動詞 parachute とともに，たとえとして使われている。どのようなたとえか，「(　A　)ことを(　B　)ことでたとえている」というように表せ。

問 5　カッコ(5)に入れるべき最も適切な語を，次の選択肢から選べ。

a．adviser

b．laboratory

c．stage

d．test

e．textbook

問 6　下線部(6)では動詞 'gain'，'lose' が使われ，あたかも勝ち負けがあるように表現されているが，「相手の勝利，あなたの敗北」とはどのようなことか，日本語でわかりやすく説明せよ。

問 7　下線部(7)は「誓いをたてる」という意味だが，具体的にはどのような誓いか，日本語で簡潔に書け。

問 8　カッコ(8)は，次のような内容の文である。これを英語に訳せ。

「最初は，彼女はブロークンなスペイン語を話したが，学期が終わる頃には自由自在に使いこなせるようになっていた」

Ⅲ　以下の文章を読み，後の問いに答えよ。

中学生のとき，生徒会の書記に立候補した友達の牧野君の応援演説を行った。政治家の演説のパロディをコンセプトにして，「彼を男にしてください！」①とか，「男・牧野はこれまで……」とか，とにかく「男」という言葉を使い倒した演説を大仰に行って，かなり受けた。牧野君も無事に当選した。

いま思い出すと，それから経過した三〇年という時間以上に，当時の光景と言葉が随分遠く，古いものに感じる。自分はもう，「〇〇を男にする」という言葉を，積極的に自分の言葉として発することはないだろう。いまやこの言葉には，どこか滑稽な印象さえ覚えるほどだ。

「男にする」というのはある意味面白い言葉で，たとえばスポーツ選手がたまに「次の試合に勝って監督を男にしたい」と言うことがあるが，これが「監督を一人前にする」とか「監督を立派にする」といった意味であれば，随分と失礼な言い方ということになる。だから，「男にする」は「一人前にする」とか「立派にする」などとぴったり同じ意味ではなく，そこには独特のニュアンスがある。ただ，ともあれこの言葉が，男性に対する伝統的なイメージや，女性には付与されない地位や名誉，それを体現する誇り，沽券（こけん）といったものにかかわる言葉であることは確かだ。たとえば，監督が女性のときに，選手たちは「監督を女にする」と言ったりはしない。

古びてきた言葉，時代にそぐわなくなってきた言葉は，ほかにも数多く挙げることができる。たとえば「未亡人」は，夫に先立たれた女性を指す，独特の雰囲気を帯びた伝統的な言葉だ。しかし，この言葉には元々，「夫と共に死ぬべきであるのに，未だ死なない人」（日本国語大辞典　第二版）という意味合いがある。そのため現在，この言葉の使用を控える傾向が社会のなかで強まっている②。また，「処女作」は一九世紀末頃から流通している言葉（欧米の maiden work 等の翻訳語）だが，私は少なくとも自分で使うことには抵抗感を覚えるようになったし，世間的にも使用頻度が下がってきているように思われる。

夫婦の呼び名は，おそらくいま，多くの人が生活のなかで実際に困っている問題ではないだろうか。「主人」も「旦那」も「亭主」も，「家内」も「嫁」も「奥さん」も，家父長制的な伝統や男性優位の観点を色濃く映し出す言葉であり③，これらの言葉の使用

を避ける人が年々増えていることは間違いない。そして代わりに，「夫」，「妻」，「連れ合い」，「パートナー」といった言葉が用いられる傾向も見られる。ただ，こうした変化は一般的な傾向とまでは言えない。関西で生まれ育った研究者から直接聞いた話では，彼が帰省して小学校の同窓会に出席したとき，「うちの妻が……」と言った途端，その言葉が場で非常に浮いてしまって，「さすがインテリ！(笑)」などと周囲にからかわれたという。ちなみに，彼以外の男性妻帯者は皆「嫁」という呼称を使っていたらしい。

いま特に難しいのは，相手の夫なり妻なりを呼ぶ場合だ。「ご主人は……」とか「奥様は……」と呼ぶのはどうかと思っても，代替となる言葉がなかなか見当たらない。「お連れ合い様は……」だと，客を案内する店の人のようだし，「パートナーさんは……」と言うのも，どうも不自然な感じになってしまう。下の名前で「茜(あかね)さんは……」などと呼ぶという手もあるが，(　　④　　)。たとえば私自身はいまのところ，時と場合に応じて多様な呼び方をぎこちなく使い分けているというのが実情だ。

女性に対する蔑視や，男女の不平等性を読み込める言葉は，ほかにも数多く存在する。では，私たちは，そうした言葉の使用をすべてやめるべきだろうか。

たとえば「(　⑤　)」という言葉についてはどうだろうか。これはきわめて一般的な言葉だが，女性を否定的な意味で捉えているから用いるべきではない，という意見もありうる。しかし，仮にこの言葉を廃止して，「柔弱だ」とか「未練がましい」，「意気地がない」といった言葉に置き換えるとしても，「(　⑤　)」はこれらの言葉のどれともぴったり合うものではないから，「(　⑤　)」がもっている固有のニュアンスが失われることになる。そのとき，私たちがそれまで「(　⑤　)」という言葉で表現してきたものはどこに行ってしまうのだろう。あるいは，それはどこかに行ってしまっても別によいもの，打ち棄ててよいものなのだろうか。

ある本のなかで，「英雄」はオス優位主義的であり，一方の性を排除する表現であるから，「偉人」，「傑物」，「逸材」などの言葉に置き換えるべき，という主張がなされていた。しかし，「英雄」と「偉人」「傑物」「逸材」などとの間には，それぞれ意味が重なる部分もあるが⑥，明確に異なる部分も存在する。たとえば，「逸材」が必ずしも「英雄」になるわけではない。また，「偉人」は人格的に優れた人物，高い徳を備えた

人物を指すことも多いのに対して，「英雄」の方は，「英雄色を好む」や「英雄ひとを欺く」ということわざもあるように，好色や狡(こう)知といった特性を備えた人物に対しても積極的に適用される言葉であって，偉人が「色を好む」とか「ひとを欺く」とはまず言われないのとは対照的だ。さらに，「英雄気取り」や「英雄的行為」，「英雄児」，「英雄譚(たん)」，「英雄時代」など，「英雄」という言葉が他の言葉と結びつく独特な言い回しも数多く存在する。こうした意味合いや言葉同士の結びつきといったものを度外視して，「英雄」をすべて機械的に「偉人」「傑物」「逸材」などに置き換えてしまえば，その分だけ日本語の表現が失われ，それらの表現が表す独特の意味合いも失われる。

雄と雌の優劣や，雄の優位を含意していると解釈できる言葉は，ほかにも無数にある。「雌雄を決する」，「雌伏」，「雄大」，「雄飛」，「雄弁」等々だ。これらの言葉をすべて廃止するならば，日本語話者は，自分たちが思考し表現するための多くの言葉を喪失することになる。

⑦字面だけ見て性差別話かどうかの線引きを行い，言い換えを行う，というのは粗雑なやり方だ。しかしだからといって，伝統的な言葉は何であれ今後も使用していくべきだ，というのも乱暴だ。性差別であれ，他の種類の差別であれ，いまでは許容しがたい(あるいは許容しにくい)物事の見方や価値観を反映している伝統的な言葉はさまざまに存在するからだ。

(出典：古田徹也『いつもの言葉を哲学する』朝日新書，2021年，218-223頁に基づき，一部改変)

注　沽券…体面，人の値打ち　　狡知…悪知恵
　　英雄譚…英雄が主人公である物語

問 1　下線部①「彼を男にしてください」が表している意味を，ここで使われている「男にする」の意味をふまえて，分かりやすく説明せよ。

問 2　下線部②「現在，この言葉の使用を控える傾向が社会のなかで強まっている」とある。「未亡人」の使用を控える傾向が強まっているのは，妻に対するかつての世間の考えが「未亡人」の意味に反映されているからであるが，それはどのような考えか。50 字以内で説明せよ。

問 3　下線部③「「主人」も「旦那」も「亭主」も，「家内」も「嫁」も「奥さん」も，家父長制的な伝統や男性優位の観点を色濃く映し出す言葉であり」とあるが，「家内」が「男性優位の観点を色濃く映し出す言葉」とされる理由を考えて 50 字以内で説明せよ。

問 4　（　④　）には，どのような文が入ると思うか。下の名前で呼ぶ場合にはどのような不都合があるかを考えながら，前の文に続くように書け。

問 5　（　⑤　）に入る形容詞を考えて書け。

問 6　下線部⑥「「英雄」と「偉人」「傑物」「逸材」などとの間には，それぞれ意味が重なる部分もあるが，明確に異なる部分も存在する。たとえば，「逸材」が必ずしも「英雄」になるわけではない」とあるが，「逸材」と「英雄」に共通する意味を考えて説明せよ。

問 7　下線部⑦「字面だけ見て性差別語かどうかの線引きを行い，言い換えを行う，というのは粗雑なやり方だ」とあるが，筆者が「粗雑なやり方だ」とする理由を本文に即して分かりやすく説明せよ。